

西洋文化との出会い

文／白崎昭一郎

第9回 渡辺洪基

渡辺洪基は弘化四（一八四七）年、医師渡辺静庵の長男として府中善光寺町（現武生市京町二丁目）に生まれた。父静庵は蘭学を好み、笠原白翁の友人として、武生における種痘の草分けの一人であった。

元治元（一八六四）年、十八歳のとき、佐倉の佐藤舜海の門に入って蘭学を学び、さらに時勢を察して、江戸の箕作麟祥や福沢諭吉に付いて英学を修め、やがて幕府の英蘭句読師として採用された。

戊辰の戦乱に際しては、会津藩・米沢藩で英語を教えたこともあったが、東京に帰ってくると、新政府に建白書を提出し、国民皆兵や殖産興業を唱えた。

これが新政府の実力者岩倉具視の眼にとまり、やがて大学南校（東京大学の前身）の少

助教に登用され、ついで中助教に進んだ。

こうした経歴からも明らかのように、当初は医師を志したのであるが、いつの間にか医学を離れ、語学力で身を立てるに至った。しかも頭脳は極めて明敏、数理に強く、組織力に優れ、次第に人に認められていった。

明治三（一八七〇）年、外務省大録（議長級）として出仕を命じられた。同年に起きた武生騒動（府中の本多家を華族に列せしめようとの運動）に連座して、一時外務省を離れ謹慎するが、間もなく復活する。

やがて、岩倉使節団の随行人員としてアメリカに渡った。しかし岩倉具視や伊藤博文が条約改正の交渉を始めると、洪基は早期の条約改正はかえって国益を損ねるとして反対し、辞表を提出して先に帰国してしまっただ。

しかし、免職にはならず、琉球使臣接待掛を経て、明治六（一八七三）年には、オーストリア兼イタリヤ公使館の二等書記官に任命される。

これより先、洪基は庄司貞子と結婚する。新郎二十七歳、新婦二十五歳で、当時としては晩婚の方だった。

洪基は、貞子に英語とドイ

ツ語を習わせて、オーストリアに連れて行った。

「欧州各国は夫婦同伴が原則で、政財官界の要人との関係を深めるために、妻帯は必要条件なのです」と洪基は語り、外交官が妻を同伴することとは、のちには普通の習慣となった。

洪基はやがて一等書記官に昇進、明治七（一八七四）年、佐野常民公使帰国ののちは、オーストリア臨時代理公使を務めた。

その頃、皇帝フランツ・ヨーゼフ一世の「極東の音楽を聞かせてほしい」との要請に応じて、貞子夫人が琴・三味線の演奏を行って、満座の喝采を博した。

任期満ちて帰国するとき、洪基は妻の貞子を一人帰し、自分は自費で英・露・トルコ・印度等を周遊し、明治九（一八七六）年に日本に帰った。

明治十一（一八七八）年、洪基は武生の有志に書簡を書いて、商工業の振興の急務なることを訴え、そのためには交通の整備と博物館の建設が必要であると論じた（写真③はその手紙の前置）。

その後、官を辞して、新聞記者の原敬（のちに日本初の平民宰相となる）と約十カ月の日本一周の旅に出かけた。

明治十五（一八八二）年に元老院議員、明治十八（一八八五）年に東京府知事に任じられた。

東京府知事は、かつて福井出身の由利公正が任命された地位であったが、洪基はまだ三十九歳の若さであった。就任後、一カ月も経たぬ七月一日、東京は未曾有の風水害に襲われた。その復興のため、新知事は忙殺されることになる。

その事業がまだ終わらぬ明治十九（一八八六）年二月、洪基は森有礼文部大臣より、帝国大学総長への就任を要請された。

従来のはらばらの大学を整理して、法・文・理・工・医の五科大学に統合し、帝国大学を設立する計画を打ち明けられ、国家有為の人材を育成す

るためには、大学の基礎を固めなければならないので、単なる学者では困る。ぜひとも組織力のある貴君を登用したいとのことであった。

洪基は熟考の末、これを引き受けた。国家財政窮迫の折から、予算は極めて乏しかったが、それを各界の寄付によって補うつもりであった。また当時の大学は、入学者に比して卒業者が極めて少なかった（学費が続かないため）が、奨学金制度を設けることでそれを乗り切った。

洪基はその後、オーストリア公使、衆議院議員、貴族院議員等を務めたが、帝国大学の基礎を固めたことが最大の功績であろう。

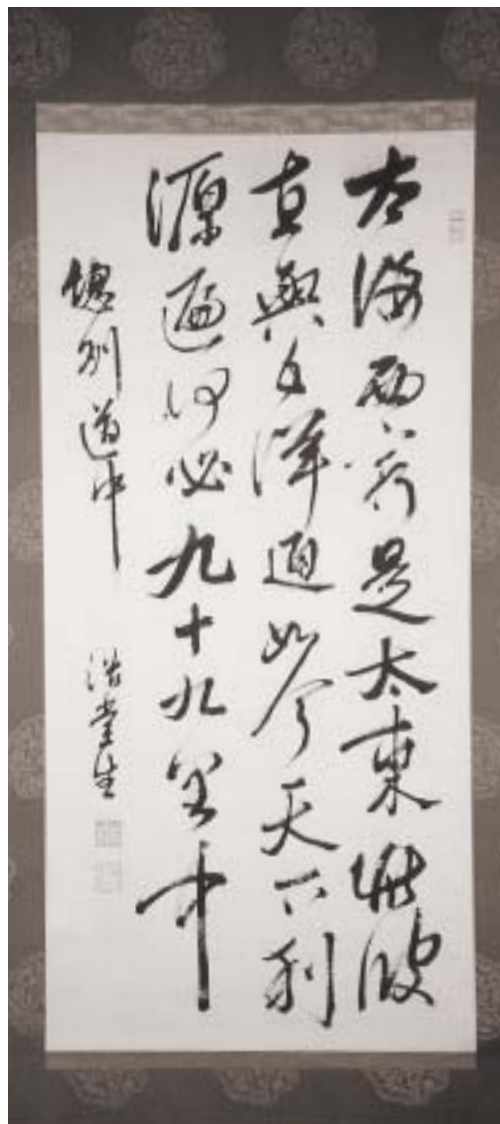
洪基は明治三十四（一九〇一）年、五十五歳で世を去った。



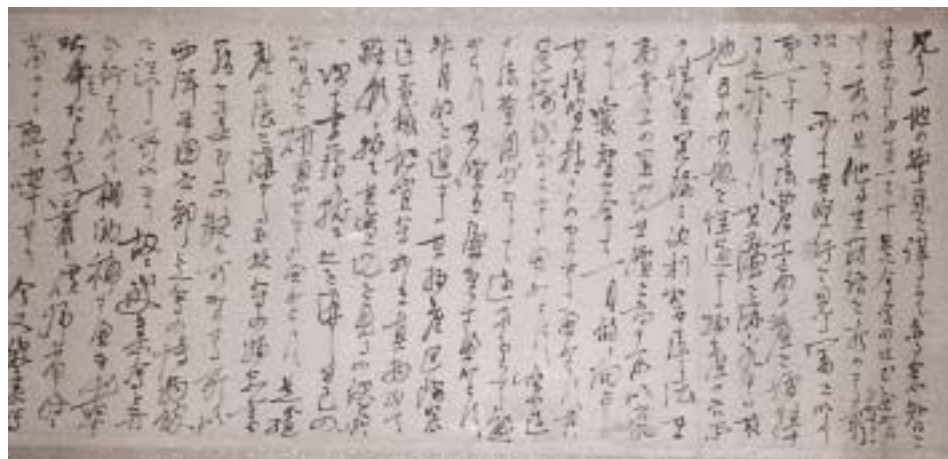
② 渡辺洪基 52歳肖像



① 渡辺洪基 28歳肖像（オーストリア代理公使）



④ 渡辺洪基筆跡 明治14年作漢詩



③ 渡辺洪基書簡「武生地方有志諸君に告ぐ」

※ ①②は新井進氏提供、③は武生市立図書館所蔵、④は齋藤隆氏所蔵